

EURO2016

ヨーロッパから難民問題を考える

佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)

JIM-NET 事務局長・佐藤真紀は 2016 年 5 月にヨーロッパに移住したイラク・シリア難民を訪問しました。写真は 2014 チョコ募金のカードの絵を描いてくれたイマーン・フセインさん (11 歳)。現在はドイツ在住。(2016 年 5 月・佐藤撮影)



シリア、イラクの紛争は、アメリカ、中東、そして、ヨーロッパの多国籍軍も参戦し、激しくなるばかりだ。戦火をのがれた難民たちもいつ帰れるかわからない。国連や NGO などの支援も先細りになってきている。闇ルートでヨーロッパを目指す難民が増えるが、一方で、船の沈没事故も相次いでいた。昨年 9 月、トルコの海岸で溺死体となって打ち上げられた 3 歳のシリア難民幼児の写真が世界に報道されると、ドイツは人道的に難民を受け入れることを発表した。「ドイツは助けが必要な人を助けます。他人の尊厳に疑問を投げかける人や、法的・人的助けが求められる状況で援助に前向きでない人などを(ドイツは)容認しません」(メルケル首相)。ヨーロッパの強国もおられるように、難民の受け入れを検討し始める。私の周りにいた難民たちは、希望を抱き、ざわつき始めた。シリア難民だけでなく。イラクにいたパレスチナ難民や、イラン難民など今までほととかれた人たちが「今しかない」と荷物をまとめだしたのだ。

そして、昨年の終わりまでに、彼らは、皆いなくなってしまった。無事にたどり着いたのだろうか？ ほかに気になることがあった。日本国内で、ドイツを例に挙げて日本も難民を受け入れるべきだ、という声が上がりはじめた。しかし、ドイツだって、恰好つけてみたものの、2015 年は 110 万人もの難民を受け入れたことで、反発も起きた。毎月一家族 20 万円程度の現金支給と住居、医療、教育のサービスを与えなければならない。

今年の 3 月になるとメルケルは音をあげた。「移民はギリシャで登録した後に EU 加盟国に分配されなくてはならない。EU の特定の国で庇護を取得したいなどという権利は難民には無い」そして、EU とトルコの間で協定が結ばれ、一部の移民(難民認定されていない人)はトルコに送り返されることになった。

一方、日本では安保法制もでき、多国籍軍に参加することで、日本の支援の在り方を変えていくべきだという考えもある。一体日本がどこへ向かえばいいのか？ ヨーロッパから難民問題を考えてみた。

NEWS

【EURO2016】ヨーロッパから難民問題を考える 佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長) 1

第 15 回 JIM-NET 会議報告 榎本彰子 (JIM-NET アルビル事務所駐在) 3

JIM-NET PEACE READING 2016 -あなたは戦争が始まるのを待っているのですか？ 永栄正顕 (俳優) 4

【東京事務所から】シリア和平ネットワークの挑戦 内海旬子 (JIM-NET アドボカシー担当) 6

【福島から】何も変わらない 5 年 野口時子 (安心・安全アクション in 郡山 (3a! 郡山)) 6

【秋田から】武器で鐘をつくり、イラクに寄贈 熊谷恭孝 (ピース・オブ・ベルズ代表) 7

鎌田代表のつぶやき「義足の少女に教えられた生きる勇気」 8

JIM-NET のチョコが熊本の子どもたちに届きました！ 8



今回、幸いにもコロンボからギリシャまで、ピースボートに乗る機会があった。5月10日には、キプロスの難民収容所で、レバノンから来たパレスチナ難民を取材できた。ギリシャのピリウス港で下船し、そこから飛行機と鉄道でドイツで移動し、難民生活をしているシリア人、イラク人の3家族を訪問した。

今回紹介するのは、イマーン・フセイン（11歳）というイラク人の女の子だ。4歳の時に白血病になり、ナナカリ病院で治療していたのでJIM-NET便りにも何度か登場している。

❖ドイツへ行く

イマーン一家は、フランクフルトから電車で1時間くらい、ライン川に面した閑静な田舎町のアパートをあてがわれて暮らしていた。父のフセインさんが駅まで迎えに来てくれて、アパートの前につくと、不意を突かれたようにイマーンが抱きついてきた。「小さい」と感じた。2年近く会ってなかったのに、抗がん剤治療のために成長していないのだ。

【なぜイラクを出る決心をしたのか】

フセインさんはいう。

「第一にイマーンの病気のこと。そして2番目は、子どもたちの教育です。」

2013年の秋。その年のチョコ募金に、どうしても赤ベコ絵のを使いたくて、がんの子どもたちに描いてもらった。一番面白かったのがイマーンの絵だった。

イマーンはよくしゃべり、私たちになついてきた。しかし、白血病が再発し、海外で骨髄移植を受けないと助からないという。JIM-NETもイラク国内で骨髄移植を行えるようにすることを目標に支援をしているが、いまだにそれは達成されていない。「家も、車もすべて売ることにしたが、あと数百万円足りない。支援してほしい」といわれたが、お金をかけても助かるかどうかかわらない。ほかにも薬を必要としている子どもたちがたくさんいるから、そのお金を使うわけにはいかない。

しかし、幸運なことに、イラク政府が、国費で骨髄移植をインドで受けさせるプログラムを始めた。イマーンと姉の骨髄が100%一致したので、インドで手術を受けることができたのだった。しかし、安心はできない。骨髄移植後も、毎月検査を受けなくてはならない。イラクでできない検査は、インドに行かねば受けられない。

「5年間、イマーンは化学療法に耐えました。イマーンだけではなく、私たちも一緒に戦ったのです。付き添いの私は、庭や、冬は寒くても病院の廊下で寝たりしなければいけなかった。ここまでがんばったんだから、これからはイマーンを失いたくない。」

実際、イラク政府は、ISとの戦費がかさみ、原油の価格も下落しており財政はかなり厳しく、医療関係の予算は減らされている。



イマーン一家の移動ルート

【IS との戦い】

フセインさんは、クルド政府軍で技師として働いていた。しかし、2014年に「イスラム国」がモスルを制圧した後は、銃を持って戦わなければならなかった。

イラク政府には金がない。イラク人はみんな銃を持っているから、軍隊へはそれを持っていけばいい。問題は、軍から支給される弾丸はたったの12発だけ。これでは、戦闘が始まったらあっという間になくなってしまふ。フセインさんは、自腹を切って60発の弾を買って、ジンマールの解放作戦に参加した。幸いにも、彼のシフトでは大掛かりな作戦は始まらなかったのだから、銃を使わずに済んだ。彼の中には戦争から逃げたいという気持ちも強かったのではないかなと思った。

ブローカーに払うお金は、相場が一人30万円前後だという。フセインさん一家が、家と車を売って渡航費を工面することは、そう難しくはなかっただろう。

【イラクを出てヨーロッパへ】

「昨年、9月7日にイラクを出発。シリア経由で陸路でイスタンブールまで行き、一度は陸路でブルガリアにいったが、ブルガリアの国境警察は我々を追い返した。6時に出発して朝の6時まで歩いた。35人くらい一緒だった。雨が降っていたし、暗くて何も見えない。イマーンは歩けないので肩車した。私は、もうへとへとになってブルガリア側についたが、ブルガリアの警察は帰れというのでバスに載せられてトルコ側に戻された。そのあと一月、イスタンブールでブローカーが準備したアパートで待たなければいけなかった。

15日後に、ブローカーが来てこれから出発するという。ゴムボートに30人くらい乗り込んだ。夜だったのではっきり見えなかった。たったの15分でレスボス島についた。

とても怖かったのだから、それは、5時間、5カ月にも感じた。レスボス島には収容施設があり、あまりにも多くの人が収容され登

録にも時間がかかる。イマーンががんだという優先して場所を提供してくれて、3日間いた。その後フェリーで、アテネの港まで連れていってくれた。そこからは、それぞれが勝手に目的地を目指して移動する。バスでマケドニアに行き、セルビア、クロアチア、スロベニア、オーストリアからドイツに辿り着いたのだ。

ドイツに着くと、700人くらいが大学の体育館に収容された。テントで仕切られていた。3カ月後に今のアパートに移ることができた。

ドイツの人たちは、イマーンのことを思い、良くしてくれる。私はエンジニアだから許可が出たら一生懸命働きたい。きっと、

ドイツの経済発展に貢献することができると思う」

イマーンに次回のチョコ募金に使う花の絵を描いてもらった。「イマーンは運がよかった。この子の絵が、イラクのがんの子どもたちを助けることに役立ってほしい」。フセインさんは、イマーンにこころして絵を描くように諭していた。

JIM-NETの支援は、シリア難民も含め、イラクにとどまっているがんの子どもたちがきちんと治療を受けれるように支援していくこと。イマーンのような生存者が、ヨーロッパから絵を描いて、支援に協力してくれる。そんなネットワークが世界に広がればいいと思う。

第 15 回 JIM-NET 会議報告

榎本彰子（JIM-NET アルビル事務所駐在）

■ 2015 年度の JIM-NET 会議を開催しました。

JIM-NET では毎年、イラクで小児がん治療に携わる医師と、治療成績や支援について議論する JIM-NET 会議を実施しています。今回で 15 回目（※注 1）を迎える JIM-NET 会議が、2016 年 2 月 26・27 日にイラクのアルビルで開催されました。今回は、イラク人医師のリカー先生が司会を務め、バグダッド、バスラ、アルビルの 3 地域 4 病院から医師が集まり、日本からは鎌田實医師（JIM-NET 代表）や赤尾和美看護師（認定 NPO 法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー代表）が参加しました。

また今回初めて、現地 NGO のクルディッシュ・セーブ・ザ・チルドレンから、小児がん支援の担当者やソーシャルワーカーが参加しました。医療従事者だけでなく、地域の支援団体や住民と協力することも、小児がん患者の治療環境を整える上では重要です。

ります（下記表）。全体的にも、2014 年の 270 人から 219 人と減少しました。

しかしこれは、新たにがんを患う子どもの数が減ったという事ではありません。「イスラム国」などの武装勢力の台頭によりモスルを含むニナワ県、アンバール県、サラハディーン県などにおいて医療状況が悪化し、地方の病院で診断を下されたものの都市部のがん専門病院にたどり着くことができなかったため、もしくは診断が下される前に亡くなってしまったケースが多いためとのことです。

また、クルド自治区のアルビルにあるナナカリ病院は、シリア難民やイラク国内避難民が増加し、新規患者の 1/3 がクルド自治区外からの患者でした。そのため、医薬品だけでなくベッドや医療従事者が不足したとの報告がありました。

■ 2014 ～ 2015 年の治療成績

1) 新規患者数の減少

2015 年の ALL（急性リンパ性白血病）の新たな受け入れた患者数は、去年度の新規患者数と比べると、全病院で減少傾向にあ

2) 2015 年の治療成績

治安悪化にも関わらずバグダッドの小児福祉教育病院、バスラ、アルビルでは、抗がん剤による初期治療を受け白血病細胞がわずかなになるまで減少する第一完全寛解率の最低目標ライン 92%以

2014 ～ 2015 年のイラク 4 病院の ALL（急性リンパ性白血病）治療成績（※注 2）（人）

病院名	新規患者数		完解導入（※ 1）を受けた患者数		第一完全寛解（※ 2）に至った患者数		継続的寛解状態（※ 3）に至った患者数	
	2014	2015	2014	2015	2014	2015	2014	2015
小児福祉教育病院（バグダッド）	104	76	101	74	93	68	85	—
中央小児教育病院（バグダッド）	72	70	65	64	61	55	54	—
バスラ小児専門病院（バスラ）	62	49	56	48	54	45	28	—
ナナカリ病院（アルビル）	32	24	27	20	25	19	21	—
計	270	219	249	206	233	187	188	—

※ 1 完解導入：がんの症状や徴候を軽減または消失させることを目的とした、抗がん剤による初期治療。

※ 2 第一完全寛解（CR1）：化学療法による寛解導入開始から 28 日以内に骨髄におけるがん細胞率が 5 %未満となった状態。

※ 3 継続的寛解状態（CCR 1）：初期治療から 2 年後も寛解状態が継続している状態。

※注 1：JIM-NET 会議は年に数回行われたこともあり、JIM-NET 設立の 2004 年から通算 15 回目となりました。

※注 2：昨年までの JIM-NET 便りに掲載した治療成績はバグダッドの中央小児教育病院のデータは入っておらず、モスルの病院のデータが入っていたので（2013 年まで）、数字に若干の違いがあります。



第 15 回 JIM-NET 会議@アルビル



上を達成することができました。但し、2014 年の成績に比べると、バグダッド小児福祉教育病院とバスラ小児専門病院における治療成績は下がっています。バスラの担当医は、完解導入時の出血が原因であるが、その出血を制御するための装置や血小板分離バッグを含む医療施設や機材が不足し、完解導入後の感染症も死因の一つであると説明しています。

一方、バグダッドのもう一つの専門病院である中央小児教育病院では 85.9% にまで低下しており、他の病院と比べ大きな差が出ています。担当医によると、完解導入時に感染症にかかり亡くなることが、大きな原因であるとのことでした。

2015 年度はイラク各地で国内の混乱が続き、政府からの抗がん剤供給が停滞し、医師たちは医薬品を他から調達しなくてはなりません。また、厳しい経済状況は食事管理や感染症対策など治療環境にも影響するため、ケアの質を保つために、今後も患者家族や地域の理解とサポートがさらに重要です。

■小児がん患者への緩和ケア

今回は、カンボジアやラオスで活動する赤尾看護師（認定 NPO 法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー代表）に、緩和ケアに関して講演していただきました。

緩和ケアとは、生命を脅かす疾患に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題に関して、的確な評価と対処（治療・処置）を行うことによって、苦しみを予防し和らげることで、クオリティ・オブ・ライフ（QOL：人生・生活・生命の質）を改善するアプローチです（WHO, 2002）。

小児がん支援において、子どもたちががんと診断されたときから、身体的・精神的な苦痛をやわらげるために、各関係者がどのようなケアができるのかを議論しました。小児がんといっても、各年齢層（乳児・幼児・少年・青年）でアプローチ方法は違い、また子どもたちが抱える痛みや苦しみも正確に理解することが重要です。ケアとしては、心理学者やセラピストなどの専門家によるものだけでなく、芸術・音楽療法や動物療法など創造的アプローチも紹介されました。また、患者家族へのサポートや医療従事者のストレスマネジメントも大切とのことでした。

イラクではまだ緩和ケアという概念もほとんど知られてないで

すが、小児がんの子どもたちやその家族を、医学的な側面に限らず、心と体と社会生活を含め総合的に支援していくためにも緩和ケアが必要であると考えます。

■がんを克服したアヤのスピーチ

11 年前に骨肉腫を患ったアヤは、手術で右足を切断しましたが、その後がんを克服し現在は義足を付けて生活しています。JIM-NET では義足の支援を行ってきましたが、今回バグダッドから 17 歳になったアヤが義足の修理のために来て、会議に参加してくれました（詳しくは P8「鎌田代表のつぶやき」をお読みください）。

■新技術の紹介

会議では、最新医療技術の紹介や治療の可能性を模索する議論の場もあります。リカー先生からは、「白血病治療における CAR-T 細胞療法の試験的利用」についての講演がありました。

これは、アメリカをはじめとして、日本では信州大学や名古屋大学などで研究されている急性リンパ性白血病の最先端治療法です。CAR-T 細胞療法は、患者自身の免疫細胞（T 細胞）が、がんを攻撃するように人工的に改変して行う治療法です。この新しい治療法は、名古屋大学の小島教授もこれまでに研究されており、今後の協力が期待できます。

■今後の JIM-NET の役割について

政治的混乱が続いているイラクでは、医薬品の不足をはじめ、病院の整備や医療専門家の不足、貧困層の治療における経済的負担、治安の問題によって、小児がん治療においても厳しい状況が続いています。特に難民や国内避難民は、住環境も劣悪であり、また遠方から病院に通う患者家族の負担は大変です。

そんな中でも子どもたちの命を救うためには、少なくとも治療環境が悪化しないように途切れなく支援を続けることです。そのため、JIM-NET では、これまでの支援を継続しながら、がんの子どもたちやその家族が治療のために滞在できるような施設をつくり、緩和ケアなどのアプローチを取り入れ、QOL を改善するなど、総合的に支援できる環境をつくっていきたいと考えています。

JIM-NET PEACE READING 2016

あなたは戦争が始まるのを待っているのですか？

JIM-NETは「非戦を選ぶ演劇人の会」が開催を呼びかけた【5.3～5.19 全国同時多発ピースリーディング】に応え、2003年イラク戦争当時にイラクの子どもたちが描いた絵を題材にした絵本を朗読する会を企画・開催しました(2016年5月8日 南大塚地域文化創造館 第一会議室にて)。出演者として、2014年夏に上演された演劇「やわらかい服を着て(※)」に出演された俳優の永栄正顕さんのご協力により、5名の俳優さんがチャリティ出演を引き受けてくださいました。当日朗読した絵本は『戦争なんて、もうやめて』(2004年04月 佐藤真紀/日本国際ボランティアセンター【編】)『おにいちゃん、死んじゃった』(2004年2月刊 文:谷川俊太郎)。JIM-NETスタッフ3名も『イブラヒムの物語』(2011年10月 文:佐藤真紀)を朗読しました。永栄さんが寄せてくださった当日の感想を掲載します。※同作品は、JIM-NETの活動をモデルに劇作家の永井愛さんが書き下ろし、2006年5月に初演されたものです。



JIM-NET 佐藤事務局長、ピースポート上からビデオメッセージ。



戦争なんて、もうやめて



おにいちゃん、死んじゃった

写真背景の絵は『おにいちゃん、死んじゃった』表紙より



出演者右から：タカミナオミさん、渡辺直子さん、永栄正顕さん、村山歩さん、高谷雅志さん



「争うより話し合おう、そこにしか未来は無いのだから」

2年前、私は「やわらかい服を着て」(永井愛作/宇治川まさなり演出)というイラク戦争開戦前夜から3年間に渡るNGOの若者たちの奮闘と苦悩を描いた青春群像劇に出演しました。

無知な私は舞台前になると大量の資料と格闘する事になるのですが、その中の一冊の本にとっても心打たれました。

それが今回ピースリーディングに選んだ作品の内の1つ『戦争なんて、もうやめて』です。

戦地に住む子どもたちの絵と文章を中心に構成されたこの本ほど平和を願う今回の企画に合うものは無いと考えたからです。

役者5名でこの作品に挑んだのですが、初めに企画者の崔さんに声をかけられた私は当初この作品を演出しようと息巻いてました。

共演者とミーティングを重ねると様々な意見が出ました。意見

の違いに憤慨する事もありましたがよくよく考えてみると自分一人で考えるよりも素晴らしい作品になっていくのが手に取るようにわかりました。

より良いものにしたいと共通の目標に向けて温度の高い人達が集まったのだから多様な意見が出るのは自然な事でした。

そして、良い意見が出ると私は恥じらいも無く前言を撤回しました。

意見がコロコロ変わる私を大きく受け止めてくれる人達と作品を創れたおかげだと思います。

リーディング公演を終えて改めて思います。

僕らは未来について平和についてもっと話し合うべきだと。

僕らが共通の目標をもっているならば、賛成も反対も大きく受け止めてお互いに耳をかたむけるべきではないかと。

争うより話し合おう、そこにこそ未来があるのだから。

永栄正顕(俳優)

シリア和平ネットワークの挑戦

内海旬子（JIM-NET アドボカシー担当）

昨年12月、「社会を動かす！NGOアドボカシー・ワークショップ」が開催されました。その参加条件に、「既に活動実績があり、アドボカシーの手法が有効な課題に取り組んでいる団体」とあり、JIM-NETは、サダーカ、日本国際ボランティアセンター、ワールド・ビジョン・ジャパンと「シリア和平グループ」として参加しました。

そこで、アドボカシー戦略を考える具体的な目標として「1. 安倍首相がG7伊勢志摩サミットにおいて、シリア和平に向けた非軍事的話し合いプロセスで日本が積極的にリーダーシップを採ることを宣言する。2. G7コミュニケにおいて、G7リーダーたちが、日本による上記1に関するイニシアチブを歓迎し、連携した行動を採ることが記載される」の2点をあげ、その実現に向けた行動計画を立てました。

ワークショップではここまでだったのですが、この計画をぜひ実現させようと同じメンバーで「シリア和平ネットワーク」を設立、G7に向けた活動を始めました。

まずは政策提言書を作り、25団体の賛同を得ました。それをG7のシュルパ（G7での首相代理）である外務省の長嶺外務審議官に提出、そして外務省の中東1課課長、G7での発言を求める安倍首相に近い与党議員数人、外務政務官と面談を重ね、理解を求めました。

私たちの日本政府への提案は、シリア人同士の対話の機会を作る次の2点です。

1. シリア人自身がシリアの未来を語るワークショップの開催
- シリア周辺国に逃れているシリア人が和平実現後を想定し、

今まで敵対してきた人たちがどのように和解し、一緒に新しい社会を形成できるのかについて自分たちで考えるワークショップを、ヨルダン、続いてレバノンやトルコにて実施する。

2. シリア和平の実現を目指すシリア人を交えた有識者フォーラムの開催

将来のシリアを担うシリア人有識者を日本に招聘し、日本の有識者等と将来のシリアについて立場や役職に縛られることなく自由に意見を述べ合う場を設ける。

これらのワークショップにおける対話によってシリア人同士がつながりを深めることから始め、ともに将来の和平につながる方策を構築することが狙いです。

5月27日に出された「伊勢志摩首脳宣言」の「シリア」項目には、「敵対行為の停止を完全に履行することを求める」とは明記されましたが、新たに取組みは提示されませんでした。また、安倍首相の議長記者会見でも、難民問題として「根本原因を断ち切るため、グローバルな支援を強化することで合意」とありましたが、「根本原因」である紛争の解決について具体的な案はありませんでした。つまり、私たちが掲げた目標は2つとも達成されなかったということです。

しかし、G7サミットが最終ゴールではありません。6年目に入ったシリアは混迷を深め、一刻も早い解決を多くのシリア人が求めています。私たちが目指すのは「シリア和平」ですから、今後も今回の提言を訴え、対話の実現を目指してまいります。

福島から

何も変わらない5年

野口時子（安心・安全アクションin郡山（3a!郡山））

5年前、東日本大震災で起きた福島原発事故でまき散らされた放射能から我が子を守りたい！と母親たちは東奔西走しました。『放射能』の事にアンテナを張り巡らせ講演会や説明会に出かけでは「どうも深刻な状況らしい、甲状腺がんになったらどうしよう、、、」「食べ物や水はどうしたらいいの？」と心配事をたくさん抱えて悩みました。「でも、引っ越す事など出来ない、これでは子どもを守り切れない」と自分を責める母親たちでした。日々の食事に使う野菜は放射能汚染のない西日本の農産物、水道水は絶対使わない、学校が休みになると1日でも2日でも、とにかく放射能のない安全で安心できる県外へと出かけ我が子を守るために考えられるすべての事をしたいと行動しました。日本中の善意や知恵が福島に溢れていました。

しかし、あの時からわずか1、2年が過ぎた頃には『ふるさと再生・復興』と銘打って経済復興を中心とし、放射能被害などなかった事にしてしまうリスクコミュニケーションを柱にした政策

が行われました。「笑っている人に放射能はこない！」「気にしすぎる方が病気になる」と我が子の健康が、将来が心配なだけに『神経質な母親』とレッテルを貼られ声をあげることすらできなくなったのです。

それは家庭の中でも同じです。夫との意見の対立、親との対立そして守っているはずの子どもとの対立も生まれます。母親たちの孤立は深まる一方です。特に5年経った今は『甲状腺がんと原発事故の放射線の関連認めず』と研究発表があり、避難解除の地域もどんどん増えてきています。

そして4月に発生した『熊本地震』により日本中の善意や関心は今度は熊本に向けられました。福島の地方紙もその善意を大きな紙面を使って報道します。私たちもあの時の善意でどんなに助けられたことか。地震の恐ろしさを知っているからこそ、お互いを思いやるからこそ恩返し、支援のお返しです。しかし、その陰にすっぽり隠れ忘れ去られた放射能の問題が解決されないまま

存在します。自然災害の多い日本ではいつまた大きな災害に襲われるかわかりません。先日も日本全国の活断層の報道がありました。そして、原子力発電所が日本全国にあることでいつまた第2のフクシマを作り出すかわかりません。

しかし、想像することは出来ます。放射能によりふるさとを汚され追われ、放射能により分断がうまれ、放射能により不安が募り、放射能の危険に晒されるのです。放射能は臭いもなく色もなく忘れ去るにはとても都合がよい物だと思います。でも、私たち母親は我が子の10年先、20年先のことで孫のこと、さらにその先の孫のことまでも心配は続きます。安心できないのです。5年前も、今も何も変わっていません。チェルノブイリをフクシマを繰り返してはいけなく強く思います。

★3a! (スリーエー) 郡山にはJIM-NETから「ホットスポットファインダー」を貸し出し、福島各地の放射線量の測定に役立てています。また毎週火曜日に「お野菜マルシェ」を開催し、北海道や信州、西日本、九州各地から届けられる安全・新鮮な産直野菜、有機野菜を取り揃え、3a! 事務所内で販売しています。

3a! ホームページはこちら。 <http://aaa3a.daa.jp/index.html>

秋田から

武器で鐘をつくり、イラクに寄贈

第二次世界大戦末期になると、日本では鉄が不足し、お寺の鐘までが持っていかれ、武器に変えられました。

戦後70年を迎えた昨年、二度とそのようなことがあってはならないと、秋田の熊谷恭孝さんが、逆に武器を集めて鐘をつくろうと思い立ったのです。

「イラクが平和になるように、イラクからも武器を集めてほしい。」と、熊谷さんをお願いされました。「うーん、それは…」。

しかし、「イスラム国」と前線で戦っている兵士に会う機会があり、聞いてみたところ、「武器が不足している。支援してほしい。カラシニコフ用の弾丸は一個1ドルするんだ」と逆に支援をお願いされてしまいました。

熊谷さんは日本国内で、第二次世界大戦当時の当時の不発弾



などを集め、5kgの鐘が2つ完成しました。1つは土崎空襲で亡くなった秋田市民の鎮魂と恒久平和を願って土崎被爆協議会に寄贈され、終戦記念日に、慰霊のために鳴らされたそうです。

そして、もう一つは、

左:アハマッド校長 右:有名な指揮者のワーム・ワラフイ 昨年12月にバグダッドの音楽バレエ学校に届けられました。アハマッド・サリーム・ガーディ校長は、「このような鐘を最初に私たちの学校に送っていただけたことをうれしく思います。私たちは、日本の皆さんのように、私たちの学校も、戦争ではなく、平和を求めることを、すべてのイラクの人たちに伝える活動をスタートをしたい。私たちの学校は音楽を通して戦争をやめるように尽力していきます」とメッセージを送ってくれました。佐藤真紀 (JIM-NET 事務局長)

★熊谷さんは昨年11月6日に開催したJIM-NET主催イベント「INORI」で登壇され、出来上がった鐘を披露しました(写真左)。以下は熊谷さんが秋田市で行っている活動の紹介です。

JIM-NET 事務局長の佐藤真紀さんとは、日本国際ボランティアセンター(JVC)在職中よりイラク支援活動でお世話になっており、聖霊高校ハンドベルクワイア主催によるイラク支援コンサートではイラクの現状について講話をお願いしたり、演奏会の収益金をJVCに寄付するなど交流をしていました。チョコ募金については、ハンドベル部員にプレゼントするだけでした。

高校教師退職後、ハンドベル音楽を通じて世界平和活動に貢献する目的でピース・オブ・ベルズ(POB)を設立し今年で7年目となりました。

昨年はシリアの難民問題がクローズアップされたこともあり、シリア難民の支援活動をしているJIM-NETのチョコ募金に協力することにしました。秋田県でのチョコ募金額が全国でも最低であることを知ったのも、動機となりました。

そこで、第一弾として、毎年開催している、クリスマス・チャリティーハンドベル演奏会でチョコ募金を呼びかけることにしました。演奏会は12月12日(日)秋田市内にある「さがけホール」でチョコ缶に絵を描いてくださったイラクの子どもたちの絵

を展示しながら、POBの会員によるクリスマスソングの演奏を披露し、チョコ募金への協力をお願いしました。クリスマス演奏会では115個募金していただきました。

第二弾として、絵の展示が可能でしたので、1月6日から4日間、秋田信用金庫の本店隣のパブリックホール1階を利用させていただき、チョコ募金をしました。秋田信用金庫職員の方を初め、新聞やテレビを見た方がイラクの少女の絵を見て、72個のご協力をいただきました。

第三弾として、秋田市内のボランティア活動を紹介する「アルヴェ市民活動フェスタ2016」が2月27日に開催されるにあたり、そこに参加させていただきました。POBの活動の宣伝とチョコ募金への協力をお願いし、20個の募金をしていただきました。

何とか秋田県のチョコ募金が増えるようにとの思いで、頑張りました。毎年開催するクリスマスハンドベル演奏会では、今年もチョコ募金をしたいとの多くの希望がありましたので、今後ともチョコ募金活動にPOBとして協力してゆきたいと思います。ちなみに今年(2016年)は12月18日にクリスマス演奏会を予定しています。

熊谷恭孝(ピース・オブ・ベルズ代表)

鎌田代表のつぶやき～「義足の少女に教えられた生きる勇氣」



「私は足をなくしたけれど、生きる権利までなくしてはいません」

イラクの義足の少女アヤさん（17歳）は、そう力強く語った。2月末、イラク北部の都市アルビルで開かれた、JIM-NET 会議でのことだ。

アヤさんは、支援を受ける子どもとして、初めてこの会議に参加した。堂々としたスピーチは、ドクターたちの心を揺さぶった。

彼女が骨肉腫だとわかったのは2003年のこと。イラク戦争で混

乱状態にあったイラクでは治療が受けられず、隣国ヨルダンのがんセンターで治療を受けることになった。骨肉腫は想像以上に進行しており、右足を切断することになった。

「このとき、私の人生は真っ暗になりました」とアヤさん。

その後、彼女は義足を装着し、歩く訓練を始めた。成長期の子どもは、成長に合わせて義足を交換する必要がある。ぼくたちは、骨肉腫の治療費とともに、義足の交換も支援してきた。

義足を着け始めたころの彼女はよく転んでいた。それでも彼女は歩くのが大好きだった。アヤさんは、義足を「希望」と言う。歩く自由を、義足がかなえてくれたからだ。

さらに感心するのは、義足を隠さないことだ。ズボンのすそをたくし上げ、金属の義足を堂々と見せている。

イラクでは、ノーマライゼーションがあまり進んではない。特に女性の障害者はほとんど社会に出てこないという。

「私は義足を隠さない。足がなくても生きることができるんだというメッセージを送りたい」

いまイラクには、病気で足をなくした人だけでなく、地雷を踏んだり、戦闘に巻き込まれたりして障害を負った人たちがたくさんいる。彼女の行動は、そうした人たちの勇氣にもなるだろう。

ぼくはアヤさんに将来の夢について聞いた。少しはにかみながら、彼女はこう答えた。

「私の夢は勉強して大学に入ること。勉強しなから、小児がんの子どもたちや障害者を応援していきたい。私には病気や障害をもつ子どもたちの気持ちがわかるから」

そして、こんなことも語った。

「私は JIM-NET のスタッフに出会い、命を救われた。平和のために私ができることがあるならば、イラク国内でも外国でも、どこにでも行って、私の役割を全うしたい」

大きな拍手がわいた。病気や障害に負けず、平和をつくりだそうという17歳の少女の勇氣に、会議に出席している大人たちは圧倒された。

イラクは、10年前のイラク戦争に続き、過激派組織 IS との戦いで混乱状態が続いている。命がけで支援し続けてきた小さな命が、全身にあふれるほどの勇氣で困難に立ち向かえる人間に成長しつつある。

命を守ることは、平和を守ること。その誇りを17歳の少女から教わった。

JIM-NET のチョコが熊本の子どもたちに届きました！

JIM-NET では福島基金として、福島の子どもたちの保養プロジェクトを行う団体や福島で活動する団体を支援しています。

その支援先の一つ、宮崎の『アースウォーカーズ』では、熊本地震の被災地でも救援活動を行っています。

今年のチョコ募金ではイベントでの募金活動や、協力してくださる店舗や団体の営業活動を熱心にしてくださり、アースウォーカーズだけでなんと3000個も取り組んでくださいました！

『イベント用などで手元に残してあったチョコレートけれど、熊本の子どもたちに届けたい』と、5月14日にアースウォーカーズが益城町や熊本市の避難所に届けてくださいました。

◆アースウォーカーズ代表・小玉直也さんの報告

熊本地震から1ヶ月が過ぎた頃、益城町の避難所になっている飯野小学校に届けました。

この日は、スポーツ少年団の益城町の野球チームが3チーム集

まり、元プロ野球選手などから指導を受け練習をしていました。益城町の多くのグラウンドは避難所や駐車場やがれき置き場になり、いま飯野小学校しかグラウンドが空いてないそうです。

そこでプレーしていた、野球少年たちの多くが避難所生活や車中泊を余儀なくされていると話されていました。

そのグラウンドの横で見た、子どもたちにチョコをプレゼントしました。

イラクの子どもたちも、熊本にエールを送ってくれています。一日も早く熊本が復興するよう願っています。



◎ JIM-NET の活動を支援してください。

・郵便振替口座：00540-2-94945 加入者名：日本イラク医療ネットワーク
・ゆうちょ銀行 金融機関コード 9900 店番 059 預金種目 当座
店名 ○五九店（○は漢数字のゼロ） 口座番号 0094945
サポーター年会費：3000円 ラナ・サポーター年会費：10000円

特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）
URL <http://jim-net.org>

Facebook <https://www.facebook.com/JapanIraqMedicalNetwork>

Twitter https://twitter.com/jim_net